

【研究ノート】

口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ観：先行研究との比較を中心に

梅木佳代

1. はじめに

本稿では北海道アイヌの過去のオオカミ観¹について考察を行う。考察の目的は、これまでに報告・発表されてきた、研究者による「アイヌのオオカミ観」の解釈と、アイヌの口承文芸²中にあらわれるオオカミの表象とを対照させ、従来定説化されてきたオオカミ観と同様の内容が口承文芸のみを対象としても確認できるかを検討することである。

アイヌ民族のオオカミ観について述べる先行研究の多くでは、アイヌ文化におけるオオカミが、信仰・崇拝の対象として位置づけられる点を重視してきた。オオカミが信仰・崇拝の対象とみなされるのは、アイヌはオオカミが有する巧みな狩りの能力に注目していたことに由来するとの解釈が根底にある。また、オオカミは狩りの獲物を人に授けてくれる、クマなどの脅威に対して人を守ってくれる、といった好意的なオオカミ観が介在したと論じる例もある。従来このようなオオカミ観が描き出されてきたことにより、近代以前の北海道におけるアイヌ民族とオオカミは、互いの存在を脅かすことなく平和に共存共栄していたとする認識が現在広く共有されているといえよう。

しかし、これまでに報告・発表されてきた論考では、上述したように記述されるアイヌのオオカミ観が、どのような資料・媒体から得た情報を元として描き出されてきたのかはほとんど言及されていない。由来が不明確な情報を用いながら論考が繰り返されてきたのであれば、実際には情報の見落としや単一化、単純化が起きている可能性が危惧される。

そこで本稿では、まずは先行研究におけるアイヌのオオカミ観についての解釈が、口承文芸にあらわれるオオカミの表象と整合性を有するかを確認した。その結果として、従来定説として知られてきたアイヌのオオカミ観の内容は、口承文芸から抽出できるオオカミの表象のみと比べてもかなり限定された内容であることを明らかにできた。実際に口承文芸中に確認できたオオカミの諸相については、可能な限り抽出し、類型化による整理を試みた。

本稿は、過去の北海道アイヌが実際にオオカミとかかわる中で築いてきたオオカミ観を明らかにすることを目的としているが、「アイヌのオオカミ観」そのものについては論じられていない。従来の先行研究に見られる解釈と問題点を整理すること、および口承文芸のみを資料とした場合に描き出すことができるオオカミ観を確認することを目的とした予備的考察と位置づけたい。

2. 研究の背景と方法

エゾオオカミ *Canis lupus hattai* とは、かつて北海道・サハリン・南千島（択捉島・国後島）に分布したハイロオオカミの亜種である。北海道では 1900 年前後に絶滅したとされるこのオオカミが、北海道アイヌの文化においてどのような位置づけとされてきたのかについては、近代以来多くの論考で考察の対象とされてきた。ところが、アイヌのオオカミ観についてはいまだに実態が不明確な部分も多い。

過去の北海道における、絶滅したオオカミと人とのかかわりのありかたを明らかにするためには、限られた資料から可能な限りオオカミに関わる記述・表象を収集して分析に取り組む必要がある。しかし、従来の論考がどのような資料から分析対象とする情報を得てきたのか、反対にこれまで利用されていない資料にはどのようなものがあるのか、この2点を明確に把握することは難しいのが現状である。根拠となる資料を確認できなければ、議論の深化を目指して新たな資料を求めることもできない。まずは個々の情報の由来の明確化に取り組むことがもっとも重要な課題と考える。

そこで本稿では、アイヌのオオカミ観に関わる先行研究の整理に取り組み、同時に従来の議論の内容と口承文芸中にあらわれるオオカミの表象との比較を行った。この2つの作業を通して、先行研究に見られるアイヌのオオカミ観に関する解釈が妥当であるか、また、口承文芸にあらわれる表象のみを用いて描き出されるオオカミ観の実際について確認することを試みる。

人とカムイが対等な存在であり、かつ両者の間では互惠性という持ちつ持たれつの関係が基本となるアイヌの世界観において、オオカミという動物がどのような位置づけを有していたのかを検討するためには、口承文芸にあらわれるオオカミの表象を分析する作業が重要であると考え。アイヌの口承文芸にはさまざまなジャンルが存在するが、その基本的な性質は「伝承」されるものである。また、坂田は、口承文芸が資料に制約されながらも過去を語る歴史叙述に相当するものであるという見解を示した（坂田 2011：28）。奥田は、アイヌ口承文芸において語られる内容と「現実」を反映する程度にジャンルごとの違いがあることに言及し、「これまでの民族学的な研究・調査の成果のなかにも、少なからず散文説話などの描写からの情報が含まれている可能性がある」（奥田 1989：27）として、アイヌの社会史・文化史を考察する際に、語り手の生活体験と連続する内容を有するジャンルの伝承の描写を利用することへの指摘を行った。本稿では、ジャンルごとのオオカミの表象の差異や傾向を分析するには至らなかったが、口承文芸中に確認できるオオカミの表象は、少なくとも話者・伝承者が有するオオカミ観が反映されたもの、過去のアイヌの人々の意識において妥当であるとして受け入れられたものとする。

本稿ではまず先行研究の分析を行い、その整理と問題点の指摘に取り組む。続いて口承文芸資料の収集方法について述べた後、口承文芸にあらわれるオオカミの諸相についてまとめる。最後に、先行研究に見られるアイヌのオオカミ観についての解釈と、口承文芸にあらわれるオオカミの表象について比較・整理を行い、口承文芸のみを分析対象として描き出すことができるアイヌのオオカミ観についてまとめることとする。

2-1. 先行研究の整理と問題点

アイヌ民族とオオカミの関わりについての論考は、1900年代から現在に至るまで、およそ100年にわたる蓄積がある。その中には明確な問題設定を行わず、個別の事例についての紹介と説明・解釈を繰り返してきた例も多く見られる。

本節では、従来のアイヌのオオカミ観に関わる著述の中でも言及される頻度が高い、アイヌ民族が「オオカミを信仰・崇拝し、カムイとして位置づける理由」として挙げられている要素に注目し、それがどのように解釈・議論されてきたかをまとめる。アイヌ文化における「カムイ」とは、人にとって感謝すべき存在、あるいは脅威とみなされる存在であ

り、そのどちらもが信仰の対象として位置づけられる（児島 2011）。従って、アイヌの人々がオオカミを「カムイ」として位置づける際の理由は、アイヌ文化におけるオオカミの価値に言及していると考えられる。

まず、オオカミをカムイとして位置づける理由を論じた初期の事例として、ジョン・パチェラーの著作が挙げられる。『アイヌの伝承と民俗』（1995）は、1901年に刊行された *The Ainu and Their Folklore* の完訳版である。パチェラーはエゾオオカミが実際に生息していた時期の北海道で、アイヌから直接の聞き取りを行った。当時の人々がオオカミに対してどのような態度をとっていたのかを目の当たりにし、それがどのような意識に基づくものかを考察した事例としては最も古いものの1つといえる。パチェラーは、アイヌ民族がトーテム崇拝を行っており、オオカミはそのトーテムの1つとして扱われていること、そして主に攻撃の獰猛さ、執拗さ、迅速さのために崇拝されていたことに言及する。また、人が「悪いクマ」に追いかけられたとき、オオカミに向かって誠心誠意助けを求めると、オオカミがやってきてクマを殺すことで人間を助けてくれるという。このことから「崇拝されるべき神」とされると述べられている箇所もある（パチェラー 1995:301）。後者では、オオカミが人にとって直接的な利益をもたらすことから価値のある存在とみなされ、そのために神として位置付けられていたと読み取れる。

一方、動物学者である犬飼哲夫によると、「兎に角狩猟に巧な狼は狩猟を業とするアイヌに古くから尊敬されていた」（犬飼 1933:12）という。1933年の論文「北海道産狼とその滅亡経路」は、アイヌ文化を主題とするものではなく、すでに絶滅したエゾオオカミを過去の記録から浮かび上がらせようとするものであった。アイヌ民族とオオカミの関わりについても分析対象とされているが、犬飼によるこの論考には「その外二三のユーカラにも狼のことがあるが、皆一種の神として礼賛していることが明瞭である」（犬飼 1933:12）など、議論を裏付ける情報の引用・出典先が全体的に不明確であるという問題点が存在する。

更科源蔵は、パチェラーと同様にアイヌから直接聞き取りを行い、オオカミと人との関わりについて精力的な事例紹介・考察を行った。更科もまた犬飼と同様に、アイヌがオオカミを意識する際には、その「狩り」の能力に注目したと論じる。オオカミはシカを獲って食べるが、自分たちが満腹になると遠吠えをして人を呼び、残りの肉を授けてくれるカムイであるという。人に獲物という恵みをもたらす存在としてのオオカミのイメージは、更科の著述には必ずと言ってよいほど登場する。その一方、更科はオオカミは直接人に危害を加えることはないが、傷つけられたり仲間を殺されたりという理由があれば、群れを呼び集めて加害者を包囲する団結心を有すとも述べる（更科 1982）直接人を襲い、危害を加える動物であるとした記述は確認できないが、「神として大事にしておいて、とってくれた獲物のおすそ分けにあずかったほうが、伶俐な方法であったのだから、いたずらに神を刺激して痛い思いをしない道を選んだ（更科 1982:82-83）」という表現からは、オオカミはアイヌにとって脅威をもたらす存在として神格化されるカムイであり、敬遠される存在であったとも読み取れる。

山田孝子は『アイヌの世界観』（1994）において、認識人類学の立場からアイヌの世界観の体系化を行った。カムイが有するジェンダーに注目し、動物に顕現する神のほとんどは男性を有していたことを論じているが、それによるとオオカミもまた、アイヌにとっては

悪いクマに対して人間の味方をする神であり、シカの肉を人間に分けてくれる「男性の神」として崇拝する対象だったという。山田の議論にはバチェラー、犬飼、更科などの先行する著述と共通するオオカミ観が描かれる。多くの先行事例を確認し、整理したうえで新たな知見を提示したと考えられる。しかし、先行する著述の内容を批評することなく利用しており、既存の研究者がまとめたアイヌのオオカミ観を定説として受け入れた。アイヌがオオカミを神格化する理由について、バチェラーの記述と犬飼・更科の記述とでは一致しない部分もみられるが、その点について言及はない。

中川裕による『アイヌの物語世界』(1997)では、アイヌの「神謡」にあらわれるオオカミは、格が高く、概して人間の味方となってくれる存在として登場すると紹介がある。また、「山に住む獣」であれば、そのカムイモシリは普通山の奥深くにあるのに対し、ホロケウカムイの国だけは天界にあるらしい(中川 1997: 51-52)とする指摘が見られる。さらに中川は、オオカミについて、力の強い動物を恐れる気持ちのみを理由として敬意を払ったのではなく、食べ残した獲物の残骸を困っている人々に対して振る舞うなどの「実益をもたらす存在」として位置付けられていたのではないかとまとめた。アイヌの口承文芸に実際にあらわれる表象に基づいてオオカミの位置づけを描き出そうとしたといえるが、紙幅や書籍の性格からか、具体的にどのような口承文芸を対象として位置づけたのかには言及がない。このことで、分析対象を「神謡」に限定し、アイヌにとってオオカミは「恐れからくる敬意」と「実益をもたらす存在」という2つの面からカムイとして位置づけられてきた可能性を指摘しながらも、他の先行研究と同様、他者による分析の再現・検証が不可能なオオカミ観となった。

ブレット・ウォーカーによる『絶滅したオオカミ—その歴史と生態学』(2009)は、歴史学の見地から日本のオオカミが絶滅するまでの経緯を論じる。本州以南および北海道の人々のオオカミ観の変遷について記述されているが、アイヌ民族のオオカミ観について検討する部分のごく限られる。ウォーカーは、アイヌは自分たちとオオカミの狩りの方法が似ているという認識を有していたことを指摘し、「その認識がこの動物に対する敬意を育てた」と論じた。ここでは考証に際して利用した口承文芸が実際に紹介されている。しかし、本文中に取り上げられる事例は限られており、そのことと関わるのか、従来論考では用いられていない新たな事例を取り上げながら、先行研究の内容を検証・批評するには至っていない。

以上が、従来代表的な先行研究であり、アイヌのオオカミ観として議論されてきた内容の概観である。これまでの論考では、アイヌがオオカミに対してどちらかといえば好意的な意識を向けていたとする解釈が主流となっていたことがわかる。オオカミはアイヌにとって「脅威から守ってくれる」「獲物を授けてくれる」という点で価値づけられ、「同じ世界観を有する」という点から親近性を抱かれていた。また、オオカミの「狩り」に関する行動・能力に注目した例は、犬飼による論考を契機としながら、現代にいたるまで「アイヌ民族のオオカミ観」の根幹をなすものとして位置づけられ続けてきた。一方、アイヌの人々の意識のうえで「脅威」であり「恐れ」をもたらす存在として位置づけられるオオカミについては、曖昧な言及があるのみで深く踏み込んだ例はない。

先行研究に胚胎するもっとも大きな問題は、ここまで述べる中でも触れたように、個々の事例や要素の由来が明確にされないままの論考が多い点である。これまで知られてきた

アイヌのオオカミ観は、口承文芸以外にも、アイヌの人々からの直接の聞き取りによって得られた証言、アイヌ語の動物名称や地名といった統一されない媒体から得られた個々の情報を集約し、それらを渾然一体としてまとめたものといえる。また、先行研究に記述される内容を無批判に受け入れ、自説の展開に利用する傾向がみられることから、アイヌの人々が語った、あるいは残した資料の内容から研究者にとって理解しやすく都合の良い要素だけが選び出され、利用され続けてきたのではないかとも考えさせられる。今後の議論を進めていくためには、事例・要素の整理に取り組むと同時に、他者による議論の検証を可能とする条件を整えていく必要がある。

2-2. 口承文芸資料の収集方法

本稿では、現在刊行されているアイヌの口承文芸の中から「オオカミ」があらわれるテキスト 68 件を収集し分析対象とした。これらの資料を収集する際には、①北海道アイヌの伝承³であること、②ローマ字あるいはカタカナ表記でアイヌ語の原文が併記されていること⁴、③登場する動物がアイヌ語でオオカミを指す「horkew ホロケウ」あるいは「horkew kamuy ホロケウカムイ」と称されていること⁵、という 3 点を基本条件とした。

調査・収集の手順としては、はじめに 1980 年代までに刊行されたアイヌの口承文芸のテキストをほぼ網羅する『日本昔話通観』(稲田・小澤 1989) の内容を確認した。同書に「アイヌ民話」として収録されていた 1,718 件のテキストの中から、オオカミが登場している事例を類話も含めて抽出し、全体で 71 話を収集した。続いて、これらのテキストの出典を辿り、上述した基本条件を満たしているかチェックを行うことで 35 件にまで絞り込んだ。この段階では、同じ話者による同じ伝承を重複して収集することを避けるため、話者名あるいは採録された地域を市町村単位で確認した。最後に、アイヌの口承文芸が収録されている文献の渉猟を行い、これまでと同じ条件を設定したうえで 33 件のテキストを追加した。次章ではこれらの作業結果として収集できた合計 68 件のテキストにあらわれるオオカミの表象を分析する。

3. 結果：口承文芸に描かれるオオカミの諸相

本章では、実際にアイヌの口承文芸中にあらわれるオオカミの表象を確認し、先行研究との比較を適宜行っていくこととする。ただし 68 件のテキストを個々に展開・分析していくことは紙幅との関係上不可能であるため、口承文芸中にあらわれるオオカミの諸相について次の 4 つに類型化して述べる。

1. 「天」と関連付けられるオオカミ：神格・人格を有し、主に人型であらわれる。「天」との関係に言及がある。
2. 「憑き神」としてのオオカミ：神格を有するが、多くは人格を有さず、主に動物型であらわれる。主人公の「憑き神」あるいは刀や木彫りなど特定の物質に宿る存在であると
言及がある。
3. 獣としてのオオカミ：神格・人格を有さず、動物型であらわれる。
4. 動物神としてのオオカミ：神格・人格を有し、人型・動物型のどちらでもあらわれる。「天」との関係が言及されない。

以上の区分に基づき、本稿ではそれぞれ必要な事例のみに言及することとする。

なお、本稿で分析対象とした 68 件のテキストの内容を引用する場合、本文中には基本的に「タイトル」<資料番号>、文章が煩雑化するおそれがある場合には<資料番号>のみであらわすこととする。資料番号は論文末に【表 1】として掲載した口承文芸リストの番号と対応するものである。

3-1. 「天」とかかわるオオカミ

口承文芸中にあらわれるオオカミの表現には、人々が住む「地上（アイヌモシリ）」ではなく、「天（カント）」あるいは「高天（リクンカント）」に住む「天に住むオオカミ神」や「天国のオオカミ神」（以下、「天のオオカミ神」と表現されるオオカミが確認できた。「天のオオカミ神」が出現するテキストは、68 件中に 31 件確認できたが、そのうち 19 件が金成マツの作品であった。全体に占める割合が多いのは刊行されている作品が多いこともあるが、オオカミを強く意識して口承文芸に取り込む個人が存在した可能性も考えられる。

以下「天」とかかわるオオカミ神についてまとめるが、「天のオオカミ神の妹」および「天のオオカミ神の娘」は、「天のオオカミ神」とのみ表現される存在とは異なる位置付けを有すると考えられるため、別項で述べることとする。

3-1-1. 天のオオカミ神

アイヌ口承文芸にあらわれる「天のオオカミ神」は、強い力を持つとされる男性のカムイである。「上天のオオカミ神」<資料 5>、「下天を守る神」<資料 18>のように、特定の位置と結び付けられる場合もある。英雄叙事詩によく登場する存在ではあるものの、基本的には名称のみ、あるいは登場人物の回想の中で言及される程度の紹介が主であった。また「本当のオオカミ神」<資料 33>や「最も偉いオオカミ神」<資料 29>など、他のオオカミ神と位置付けを区別する名称で呼ばれることがある点が特徴といえる。「若きチクペニ神がオタサム村を討つ物語」<資料 33>では、オオカミ神たちの中に存在する序列が明確に述べられており、「最も高い天の国の／狼神のうちでも／位の高い／狼神」<資料 33：62>が頂点に立ち、位の低い多くのオオカミ神、さらに地上に暮らす獣の姿のオオカミ神が位置づけられている。「人間国土の／深い山／狩場にいる」普通のオオカミ神にとっては、天上のオオカミ神が「自分たちの／仲間のうちでも／頭である／狼の神」<資料 33：55>であるとする表現があり、このことから、オオカミ神の位置付けには天と地上のどちらに存在するかによって位が異なる場合があったと推測できる。

「天のオオカミ神」があらわれるテキストには、人の姿で主人公と敵対するオオカミ神の存在も確認できる（「天のオオカミ神の娘」に関わるものは後述する）。「ルロアイ神とポイヤンベの戦」<資料 5>では、主人公と「上天のオオカミ神」の兄・姉との戦いがあったことが回想される。また、前述した<資料 33>では、実際にオオカミ神と人間とが争う詳細な戦いの描写が行われ、「狼 戦争（ホロケウ トゥミ）」という表現が用いられた。動物と人との大規模な戦いが描かれたこの英雄叙事詩は、オオカミをめぐる伝承の中では多くの要素から異質な内容ととらえられる。

3-1-2. 天のオオカミ神の妹

「天のオオカミ神」には、ストーリーの中で複数の兄弟姉妹がいると設定される場合があるが、中でも「天のオオカミ神の妹」は、口承文芸中に特殊な位置づけを確立するようである。この存在は、登別、旭川、浦河、門別の話者のテキストにあらわれる。多くの事例が存在するが、基本的には「天」から降って主人公の父親の元に嫁ぎ、主人公を産んだのちに夫と共に天へと帰ってしまうパターンとなり、主人公が半神半人であるという血統を説明する文脈の中でのみ言及される場合もある。

人と婚姻関係を結ぶ「天のオオカミ神の妹」の存在は、「神は神連れ、人は人連れ」（アイヌ無形文化伝承保存会 1986 : 51）を原則とするアイヌの世界観にあっては異質な存在ともいえるが、現在ではアイヌの婚姻観と関わる存在であると理解されている。この点については、本田（2005）によって、アイヌ文化には「父親同士が兄弟であるいところ」同士は結婚できるが、「母親同士が姉妹であるいところ」同士の結婚を禁止するという婚姻規制が存在すること、英雄叙事詩に登場する「天のオオカミ神の妹が、この婚姻規制と結び付く存在である可能性が指摘されている。英雄叙事詩の世界では、主人公の母を「天のオオカミ神の妹」と位置付けることで、主人公にとって「母親同士が姉妹であるいところ」が存在しなくなるという（本田 2005 : 108-122）。

「天のオオカミ神の妹」には、動物としてのオオカミと結びつく要素が付随する場合もある。金成マツの英雄叙事詩に登場する天のオオカミ神の妹には、その象徴として「オオカミの皮／金の皮」〈資料 24 : 55-56〉や「狼の皮衣の／美しいなめし皮」〈資料 40 : 113〉と表現される「オオカミの毛皮」を身にまとう描写が見られることがある⁶。英雄叙事詩では、神謡や散文説話に比べて大量かつ細やかな衣服描写がなされる傾向があり、これは基本的には自他を区別するとともに、自己の存在を特徴づける表象としての役割を担うと考えられるという（本田 2004 : 64）。天のオオカミ神と動物としてのオオカミとの関係性をどのようにとらえるべきかという問題については本節のまとめで述べるが、北海道アイヌの口承文芸においてオオカミの毛皮を身にまもってあらわれる「天のオオカミ神の妹」は、実在する動物のオオカミと直接的に結び付けられて顕現する事例の一つと考えたい。

さらに「天のオオカミ神の妹」が「イヌ」の姿であらわれる例が、「始祖神の自叙」〈資料 63〉や「私を助けるために神が大鯨を頼んだ」〈資料 38〉など複数確認できる。正体はオオカミでありながらイヌとして登場していることについては、オオカミとイヌを同様の存在と理解しての表現と考えることもできる。その一方、〈資料 63〉では「(そも) 女といふものは／神々よりも／親切にしいとほしみを／かけらるる／ものなるぞ」〈資料 63 : 508〉という理由で主人公のもとへ出向いている場面も見られる。「天のオオカミ神の妹」は、他のオオカミ神より人に対して親しい存在として位置付けられ、そのため、オオカミよりも人に身近なイヌの姿であらわれるとも推察できよう。

以上に述べてきた「天のオオカミ神の妹」があらわれるのは、前述したように登別・旭川・平取・浦河のテキストである。一方、静内のテキストには「天のオオカミ神の娘」があらわれる。

3-1-3. 天のオオカミ神の娘

「天のオオカミ神の妹」が基本的に主人公の味方として現れるのに対して、静内のテキ

ストにあらわれる「天のオオカミ神の娘」は、立ち位置が異なる。「ユカラ 8」<資料 10>では、天のオオカミ神の娘は、主人公の父親が神の国まで聞こえる名声の持ち主だったことを妬み、家と家族ごと焼き殺すという行動を見せる。これは人の味方としてあらわれる「天のオオカミ神の妹」とは異なる。また、外見も完全な人の姿とは異なるようで、「ユカラ 8」<資料 10>では、「何かを食べるときには／耳まで大きな口が／大きく開き／目であるところは星のように／輝きながら私をにらみつけていた」<5>、「長い太刀を／身に差し込んで／長い太刀を引きずり引きずり／立ち上がると／長い太刀を身につけて／引きずり引きずりしながら／家から出たり入ったりしていた」<6-7>という特異な表現が見られる。長い太刀を引きずりながら行動しているというのは、「尾」の様子を指しているとも推測される。そのほかにも骨を食べる、手足が大きいなど、普通の人の容姿とは異なる表現が用いられている。これらはおそらくオオカミの外見的な特徴として捉えていた要素が強調されていると考える。

また、「ユカラ 12」<資料 11>では、許嫁のいる主人公に横恋慕し、結婚が承諾されないようであれば殺してしまおうとする「天のオオカミ神の娘」が登場する。このテキストでは、「天のオオカミ神」は6人の兄弟、6人の姉妹で登場する。12人のオオカミ神は、戦いの際には男女ともに槍を持ち、踊りながら戦う表現がある。その姿はテキスト中で「勇者」と表現されている。前述した<資料 10>でも「太刀」との関連付けがあることから、武器やその扱い、戦いに秀でた性質を有するのかもしれない。

以上に概観をまとめてきた「天」と結び付けられるオオカミについては、先行研究ではほとんど触れられていない。基本的に人の姿であらわれること、また、語り手・聞き手にとって内容や描写が「現実離れ」（奥田 1996：22）していると捉えられる英雄叙事詩というジャンルの中に多くあらわれることから、実在する動物としてのオオカミを論じる際には議論の対象からあえて除外されてきた可能性もある。しかし、この神の存在はアイヌのオオカミ観を述べる際に切り離されるべきではないと考える。

アイヌ口承文芸のジャンルの中でも、カムイ自身が叙述者となる神謡では、神々の中に動物神・自然神だけでなく、狩猟神や家の守護神などの「観念的な神格」（荻原 1987：383）が見られることが知られている。ジャンルは異なるが、天と結びつけられるオオカミ神もまた、天に暮し、主人公の婚姻規制を解除できるという条件を備えた観念的な神格として、オオカミと関わらなくても存在することは可能であると考えられる。しかし実際には、身にまとう毛皮や容姿の特徴、「若きチクペニ神がオタサム村を撃つ話」<資料 33>では、オオカミの群れが身震いひとつで次々と人に姿を変えるという描写も見られるなど、地域や語り手によっては動物としてのオオカミと直接的に結び付けられる存在であったといえる。英雄叙事詩というジャンルに登場する存在でありながら何故現実のオオカミと結びつけられる必要があったのかという疑問に答えるためには、アイヌのオオカミ観を踏まえた上での議論が必要であろう。

その一方で、英雄叙事詩に頻出するオオカミ神の息子・娘を考える際には、北海道アイヌが使う *horkew* という言葉が「オオカミ」を、*horkew-po* が「オオカミの子ども」を指すのに対し、サハリンアイヌでは異なる意味をもつ言葉となることも考慮しなければならない。サハリンアイヌにとって *horkeu-po* は「青年」を指す語であるという。北海道アイヌにとってはオオカミを意味する言葉が、地域によって異なる意味を有したことについては

蓮池（1986）による指摘がある。しかし、管見の限りでは、その詳細な検討に取り組んでいる事例は見られない。

英雄叙事詩に登場する天と結びつけられるオオカミ神やその子孫については、オオカミ観に関わる議論と切り離すべきではないが、ジャンルごとに異なる口承文芸の解釈の問題、伝承の中に反映される婚姻規制とのかかわり、さらにサハリンアイヌをはじめとする他地域との断絶・連続性を検討しながら、多面的な分析に取り組む必要がある。

3-2. 憑き神としてのオオカミ

「憑き神」としてのオオカミの存在もまた、これまでの先行研究中では触れられてこなかった要素である。今回収集した 68 件の口承文芸のうち 22 件にあらわれたこの表象は、主として英雄叙事詩に登場する「刀」の意匠と関わる。これは日本から伝わった刀の鞘や柄などに描かれた動物をオオカミと理解したことに由来するとされる。このオオカミは刀に宿る存在であり、刀の所有者である主人公を守護する憑き神としての性質を帯びる。ほぼ定型化した文脈の中にあられることから、アイヌの口承文芸の中でも特定の位置づけを確立していたのではないかと考える。

3-2-1. 刀の意匠

英雄叙事詩に登場する「虎杖丸」と呼ばれる刀、および「神授の刀」に施された意匠としてのオオカミの表現が見られた。虎杖丸の伝承は、現在「虎杖丸」<資料 52>のほか、「虎杖丸別伝」<資料 18>、「クトネシリカ」<資料 51>、「KUTUNE SHIRKA」<資料 67>という、異なる話者によって残された 4 つのテキストが刊行されている。その 4 件すべてに、若干表現は異なるが、オオカミの意匠の表現が確認できる。

憑き神としてのオオカミは、虎杖丸とは特定されない「神授の刀」の意匠として登場することもある。ただ、「神授の刀」については、名称のみで意匠にまでは詳しく言及されない場合もあり、必ずしもオオカミと結びつく要素であったとは言い切れない。

3-2-2. 木彫りのオオカミ

本稿において分析対象とした口承文芸のうち「木彫りのオオカミが私を助けてくれた」<資料 53>および「オオカミの木彫りを持つ女を救ったウエペケレ」<資料 68>は、「木彫りのオオカミ」が登場するほぼ同一内容のテキストである。この 2 件のテキストに登場する「木彫り」⁷とは、妹の無事な成長を願って兄が手作りしたものであり、それが魂を得て悪いクマ神から女性を守ってくれる存在となったという背景がストーリーの中で説明される。

木彫りのオオカミは、持ち主の女性を狙うクマが現われると、実体のある動物となって吠えかかり、戦う役割を果たす。ただ、実体化した際の容姿が、<資料 68>では明確に「イヌになって」と表現される。木彫りの姿がオオカミでありながら、実体をもってクマと戦う際にはイヌになるという不可解さはあるが、オオカミ（イヌ）とクマを関連付け、クマに対抗しうる存在として登場しているといえる。

以上に述べてきた憑き神としてあらわれるオオカミは外観の描写を伴うことが多く、アイヌ文化におけるオオカミの表現、ひいてはどのような要素をもってその動物をオオカミであると見なしたかを知るうえで重要な情報といえる。

3-3. 人格を有さない「獣」としてのオオカミ

アイヌの口承文芸では、その世界観を反映して動物に人格が与えられ、人と動物が同等の存在として扱われる。しかし今回、ストーリーの中で終始人格を有さず、単なる獣として描写されるオオカミの存在が確認できた。この存在を人格も人型も有さない「獣」としてのオオカミとしてまとめる。

3-3-1. 人を襲うオオカミ

「狼から逃れた娘」<資料 12>と「狼の襲撃から危うく難を逃れた女の話」<資料 46>は、酷似した内容のテキストであり、大勢の女性がオオカミの群れに襲われ、食い殺された事件が描かれる。この2つのテキストの中では、人を襲うオオカミは人格を持たず、終始人との意思疎通を行わない。

また、理由もなく人を襲って殺すような「悪神」であれば、危害を加えた悪神の側も相応の罰を被るとというのがアイヌ民族の伝統的な世界観であるはずだが、これらのテキストでは人を殺したオオカミに罰が与えられたという描写はなく、通常のルールが適用されていない。このことから、アイヌの口承文芸としては異質なものであるとの指摘がなされている（中川 2000）。

3-3-2. 獲物を授けるオオカミ

「カムイ・ウチャシコマ」<資料 55>は、先行研究に見られる記述と深いかかわりを有する。ここでは、「サマイクルカムイ」が飼っていたという12頭のオオカミの行動が描かれる。このオオカミたちが人格や神格を有していることがわかる描写はなされないが、冬になるとコタンの近くで遠吠えをし、人々に自分が捕えたシカを与える存在として位置付けられている。

このような条件と合致するオオカミがあらわれるテキストは、本稿で分析対象とした口承文芸では1件しか確認できていない。しかし、2-1で触れた従来の先行研究に見られる優れた狩りの能力を有し、人に獲物を授けてくれるカムイというオオカミ観を直接的に裏付ける事例であるといえる。

人格を有さない獣として表現されるオオカミがあらわれるテキストでは、「獲物を授けてくれる神」として人に利益をもたらすオオカミ観が裏付けられる一方で、「オオカミが人に危害を加える」という、人にとっての脅威としてのオオカミが描かれる結果となった。

3-4. 動物神としてのオオカミ

本節では、「動物神としてのオオカミ」について分析する。人格を有する表現が見られ、神格化された存在だが、ここではさらに（1）人と同様の容姿であられるが、本性はオオカミである、（2）動物（オオカミまたはイヌ）の姿であられるが、人語を解し、人格をもって人と関わる、2つのタイプにわけてまとめる。

3-4-1. 人と同様の容姿であられるオオカミ

この類型にあてはまるオオカミの存在は、3-1で述べた「天」と関連付けられるオオカミ神と同様に、神人同形の観念が強く影響していると考えられる。「天」との関わりの有無

を除外して区別を行おうとすると、正体が露見する場面がある、あるいは明確に特殊な能力を有する描写が見られる、という点が挙げられる。

オオカミとしての正体が露見する事例として「神の子が父親である神から、宝物を授かった話」<資料 6>がある。ここでは主人公に宝物を授けるオオカミ神が登場する。「白い小袖」を着た人の姿に化けてあらわれるが、正体が露見した際は大きなオオカミとなってその場から逃げだす描写がある。

一方、「狼の神の話」<資料 7>では、登場するオオカミ神は人と同じ姿をとるが、化けの皮が剥がれる描写はない。その代わりに特殊な能力を有する表現が見られる。このテキストにはオオカミ神の兄、オオカミ神の妹、オオカミ神の3者があらわれる。この「オオカミ神の妹」は、「よくできた娘」として、多くの人から嫁にと望まれる存在である。そして妹を嫁にと望む人々に対して困難な課題を課すのがオオカミ神の兄である。対して、はじめは「エカシ」として登場し、後に「ホルケウカムイ」であったと判明する。これらの神同士が親子や親戚にあたる存在なのかは明言されないが、鍋に汲んだ水に自分の頭からシラミを一匹落とすと料理ができる、誰にも倒せない杉の木を錆びた鋸・斧で倒すなど、特殊な力を持つ表現がある。この神は主人公に力を貸し、無事にオオカミ神の妹と結婚した後になって、夢に現れて正体を明かされることになる。

「ポンオタストウンクルヤイエウカラ」<資料 15>でも、「エカシ」と呼ばれる年老いたオオカミが主人公の養い親となっている。大きな猟場を持ち、シカやクマを獲物として獲り、交易を行う存在と表現されるが、ここでもストーリーの中で非常に力があること、獲物をよく獲るがそれに対して祈るといふことをしないこと、猟場に大勢の仲間がいる等の特殊性への言及がある。

確認できる事例が少なく明確に論じることができないが、人と同じ容姿を持つと表現されるオオカミ神は、基本的には人を援助する立場に立つ存在として描かれるようである。また、白い衣服を身につけている点も、共通する特徴といえる。

3-4-2. 獣の姿で人と関わるオオカミ神

獣（オオカミまたはイヌ）の姿であらわれるが、人語を解し、人格を有することで人と関わるオオカミの存在については、オオカミとイヌのどちらとして称されるかによって①オオカミ神として人とかかわるパターンと、②イヌと称されながら人とかかわる2つのパターンがある。さらに、かかわる相手が人ではなく他の動物神となる③オオカミ神—他の動物神のパターンも確認できる。

①オオカミ—人

「けちんぼ狼」<資料 1>と「狼神の神謡」<資料 56>は、オオカミが叙述者となる神謡である。内容としては、鯨を一頭半背負って帰る途中のオオカミに、人が一切れで良いから譲ってくれるよう頼むが、オオカミは聞こえないふりをする。怒った人間（実はカムイである）は、オオカミの死を予言し、その予言の通りの目に遭って死んだオオカミが「獲物を一人占めせずに分け与え、心を美しく持つように」という教訓を語るというものである。代表的な神謡のパターンを踏襲していると思われる。

一方、「狩人の旦那（大将）の自叙」<資料 61>では、狩りの獲物としてのオオカミと人

の互酬の関係の一部が描かれる。オオカミが狩人の力を計るために勝負を挑み、狩人に向けて自分の持つ「足の力」、「力の強さ」、「恵み」を与えようと申し出る。その際自分（オオカミ）を祭るのであればという条件を課しており、狩人はオオカミを「鉄砲」で撃ちとって家へ帰り、オオカミを丁重に祀ることで「長者」となって人生を全うするという結末を迎える。

これら3件のテキストでは、人と関わることによってオオカミに死がもたらされている。

②イヌと称されるオオカミ一人

はじめは「イヌ」と称されているが、後にオオカミ神であると判明するというパターンをもつテキストがまとまって確認できた。いずれの場合も、最初はイヌとして登場した存在が、最終的にはオオカミであったと判明するという点で共通する。

「犬＝狼神に育てられたオタサム人の自叙」〈資料 3〉、「主人を助けられなかった犬」〈資料 13〉、「狼が人間の母親に虐待された」〈資料 14〉、「オオカミ神と村おさ」〈資料 64〉の4件のテキストに「イヌ」として登場するオオカミ神は、単独で狩りに出かけてはクマやシカをよく獲ることで「主人」である人間を助け、豊かな暮らしをさせてくれる存在と位置づけられていた。しかし、主人やその家族がイヌをないがしろにするとその家を出て行ってしまい、虐待の度が過ぎると元の主人や周囲が報いを受ける。〈資料 64〉では、村が全滅する結末を迎えている。

上記の条件に該当しない「トゥ ミク ミク」〈資料 66〉は、オオカミと「悪党カワウソ」との戦いを語る神謡である。声を頼りに主人を探しまわるイヌ（オオカミ）が、主人を殺したうえ、声真似をしてイヌをからかって笑ったカワウソと戦うが、結果としてオオカミもカワウソも相打ちとなって死んでいる。ここには「主人を助けられなかった犬」〈資料 13〉で描かれるものと同様のモチーフがあるように思われる。〈資料 13〉では、主人を悪いカムイ（クマ）に殺されたイヌ（オオカミ／表現としては一部に「オオカミの犬 horkew seta」）が、そのことを悔やんで自殺する。これら2件のテキストでは、主人が殺されるとその後追いをするイヌ、そして主人の死が発覚すると同時にイヌだったものが実はオオカミであることが判明するという2点で共通している。

口承文芸中に「イヌ」として登場するオオカミ神は、〈資料 66〉を除けば、1頭であっても獲物をたくさん獲るという特質に必ず言及されていた。これは従来の先行研究に見られるオオカミの「狩り」の能力に注目した神格化と関わる要素と考えることもできるが、口承文芸の内容を見ると「イヌでありながら狩りが巧みで、人に富をもたらす動物の正体はオオカミである」ことを示すための仕掛けであるとも読み取れる。アイヌの世界観におけるイヌとオオカミの関係性として、イヌの祖先がオオカミであるために関連付けられると論じる例もあるが（更科・更科：1976）、より慎重に考証していく必要がある。

③オオカミ—他の動物神

動物神としてのオオカミがあらわれる口承文芸のうち、内容に人がまったく登場しないテキストが5件存在した。こうしたテキストでは人が登場しないことにより、他の動物神とオオカミとの位置付けや特性の違いがあらわれている。

「小オオカミの神が自ら歌った歌」〈資料 45〉は、小さなオオカミの神が叙述者となる神謡であり、炉縁魚という魚とオオカミが素性の当て合いをする。登場する動物がオオカミである理由を明確に論じることはできないが、アイヌが神の属性として認識していた「物

を見る inkar」の能力が描かれ、子オオカミであっても既に物を見通す力を有していることを示す表現と考えられる。

「襟裳岬のシャチ神」<資料 50>では、アイヌ語で「足の早い神」と表現されるキツネの神が叙述者となる。そしてこの中でキツネがオオカミを指して「足が速過ぎる」と評している。

一方、「狼の女神の自叙伝」<資料 58>および「斑紋鳥の神の自叙」<資料 59>は、オオカミがクマと争う力をもつ点に注目した事例といえる。<資料 58>では、襲ってきた「悪い妖熊」に「母親」であるオオカミ神が応戦する。しかし、危うくなったところで、子どもたちが父である「天のオオカミ神」に助けを求める。すると、「父親」であるオオカミ神が天から降りてきて妖熊を踏み砕き、地下の冥府へ踏み落としてしまう。ここではオオカミ、特に「天のオオカミ神」が、クマに対して圧倒的な強さを有する存在として位置付けられているといえる。

<資料 59>でも「妖熊」と戦うオオカミ神の姿が描かれるが、負けそうになったオオカミが助けを求めるのは「斑文鳥」という鳥である。オオカミが単独でいる場合は、妖熊と戦うことはできても、勝つことはできないのかもしれない。

他の動物神とかかわるオオカミ神の表現からは、足の速さや遠吠え、クマと戦う行動など、人々が注目した個々の要素について言及されていると読み取れる。

4. まとめと今後の課題

本章では、ここまでの結果をまとめたいので今後の課題を述べることにする。まず、従来の先行研究を整理すると、オオカミはアイヌの人々からどちらかといえば好意的な態度を向けられる存在であったと考えられてきた。アイヌ民族がオオカミを信仰・崇拝し、カムイとして位置付ける理由としては、オオカミの「狩り」の能力が注目されてきたといえる。脅威や恐れをもたらす存在としてのオオカミについては、意識されることはあったようだが、深く踏み込んだ議論は行われてこなかった。この点については、アイヌ文化の研究者である和人側のオオカミ観等の影響も確認する必要がある。

北海道アイヌの口承文芸を収集し、その内容を展開・分析したところ、先行研究が述べる好意的なオオカミ観、およびオオカミの狩りの能力への注目は、口承文芸のみを分析対象としてもあらわれた。この結果から、これまでの研究者が取り組んできたアイヌのオオカミ観についての論考と、論じるにあたって参考とされた可能性のある口承文芸の事例を仮定的に結びつけることが可能となる。

その一方で、これまで知られてきたアイヌのオオカミ観がかなり限定されたテキストを元として論じられてきたことも明らかになった。従来「北海道アイヌでは」とアイヌ民族全体に普遍化されてきたオオカミ観は慎重に検証される必要がある。とくに「人に獲物を授けてくれるオオカミ」というイメージは、今回対象としたテキストの中には1件しか該当しない。収集することができなかった資料に多くの事例があらわれていると考えることもできるが、地域差や時代差等を念頭に置き、検証しなおしていく必要のある表象と考えたい。

従来はオオカミという動物と関連付けた考察の対象とされてこなかった、「天」と結びつけられるオオカミ神の存在は重要であろう。口承文芸中で「勇者」として言及される点、

また虎杖丸や神授の刀という「武具」との関連付け、そして男神も女神も戦争に臨み、戦う描写がある点は、今後、アイヌ民族のオオカミ観について考察していくうえでは注意を要すると考える。アイヌ文化に関わる取り組みの中でも、幣所の構成とそこに配置される諸神に関する研究では、地域によっては「武勇の神（ホロケウカムイ）」と称される神が存在することがわかっている（煎本 2010）。従来、おそらく動物神としての要素を中心として描き出されてきたアイヌのオオカミ観においては、オオカミは「狩り」の能力と強く結び付けて意識されてきた。しかし、「天」とかかわるオオカミ神と、その性質を議論に加えることで、「狩り」だけではない他の面が注目されていた可能性も浮かび上がる。アイヌ民族の伝統的な世界観における「狩り」と「武勇」という要素の関連性、そして地域や時代ごとの差異も含めて、今後検討していきたい点である。

オオカミが獲物を狩る能力は、口承文芸中では、オオカミそのものの特質としてもあらわれるが、人に飼われているイヌが「実はオオカミである」ことを示す際に付随する要素でもあることがわかった。オオカミとイヌは口承文芸においては頻繁に入れ替わるが、正体がオオカミである、あるいは完全に区別されないまでもオオカミとしての性質を帯びるイヌがあらわれる。こうしたイヌは、単独でもシカやクマを狩ることができ、主人に富をもたらす存在と位置付けられる。口承文芸の内容のみを見ると、イヌからオオカミへの入れ替わりには特定の条件を伴うように思われたが、人と友好的に関わろうとするオオカミはイヌとしての性質を帯びる必要があるという観点も視野に入れ、アイヌ民族のイヌ観を考慮していく必要がある。

アイヌのオオカミ観について、これまで「オオカミは基本的には人を襲わない」、「人に直接的な危害は加えない」という要素が存在したが、口承文芸では人を襲い、食い殺すオオカミの表象が確認された。今後さらなる事例の収集が必須ではあるが、アイヌのオオカミ観の中にはオオカミを恐れ、人を襲う可能性のある動物に対する緊張感が存在したとする仮説を裏付けることはできよう。何故、オオカミが人を襲わない動物であるとみなされるようになり、現在ではその意識が主流であると考えられるようになったのかという観点からも興味深い議論が可能であると考えられる。

以上の通り、本稿では北海道アイヌのオオカミ観について、従来の先行研究に見られる解釈と問題点の整理、および口承文芸のみを分析対象として描き出すことができるオオカミの諸相についての確認を行った。今後は口承文芸の収集・分析を続け、本稿における議論を深めていくと同時に、口承文芸以外の地名・呼称・聞き取り記録などを分析対象に含め、アイヌのオオカミ観についてより多角的に検討していくことを試みたい。

謝辞

本論文は、平成 23 年度に北海道大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正し、北海道民族学会 2012 年度第 1 回研究会（7 月 8 日）において行った報告「エゾオオカミをめぐる歴史と文化：北海道アイヌのオオカミ観についての再検討」の内容を元としています。修士論文の調査・執筆、審査にあたっては、多くの方々からのご協力・ご助言、ご指導をいただきました。また、2012 年度の報告当日には参加者の方々よりとても有益なコメントをいただくことができ、大変参考になりました。投稿に際しては査読者の方々から丁寧かつ詳細なご指摘をいただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

註

- ¹ 石田 (2013) は、「人が動物をどのように考えているかを動物観とよぶとすれば、「動物観」は動物の存在を意識し始めるとともに成立する概念である」(石田 2013: 2) とする「動物観」の定義を提唱した。本稿で用いる「オオカミ観」という用語は、この「動物観」の定義を踏まえた上で、人がオオカミという動物を「どのようなものとしてとらえたか」、また「どのように関わろうとしたか」という意識・態度を含む、オオカミに対する考え方を指すこととする。
- ² 本稿で扱うアイヌの「口承文芸」とは、広く「語り手が口頭で演じるのを聞いて、楽しみ味わうことで伝えられてきた文芸」(北海道立アイヌ民族文化研究センター他編 2009: 6) と定義される中でも、特に「物語性を持った口承文芸」のみを指す。内容の分類については神話、英雄叙事詩、散文説話と分類する「アイヌ文学」(中川・志賀・奥田 1997) を参照した。
- ³ 北海道アイヌの口承文芸に対象を絞り込んだのは、主としてサハリンアイヌの事例を除外するためである。サハリンアイヌのオオカミ観と北海道アイヌのオオカミ観を比較した例は確認できず、本稿で踏み込んだ議論を行うには至らなかった。
- ⁴ ローマ字あるいはカタカナ表記でアイヌ語原文が併記されているテキストのみを対象としたのは、「オオカミ」と翻訳された言葉を確認するためである。例えば「ヨサンポロのウウェペケレ *uwepeker* (昔話)」(北海道教育庁社会教育部文化課編 1989) では、日本語訳文では「オオカミ」と表記される存在について、アイヌ語原文を確認すると、話者は「*seta*/セタ (犬)」や「*cicikew nitne hi*/チチケウ ニツネ ヒ (化け物)」という言葉を用いている。オオカミなのかイヌなのか明確な位置づけが困難であることから、本稿における考察対象からは除外した。
- ⁵ 登場する動物がアイヌ語でオオカミを指す「ホロケウ *horkew*」あるいは「ホロケウカムイ *horkew kamuy*」の表記であることを確認したのは、前掲注の内容と関わり、筆者の現在の知識では、「*seta*/セタ」や「*wose-kamuy*/ウォセカムイ (クマを指す名称といわれることもある)」の名称で示される動物が、実際にオオカミなのか別の動物の可能性のあるのかを確実に判断することができないためである。
- ⁶ オオカミ神の妹の象徴として「金のオオカミの毛皮」があらわれるのは、現在確認できる口承文芸の中では、全て金成マツによるテキストである。
- ⁷ 「木彫りのオオカミ」という存在については、アイヌ民族における造形物についての認識と合わせて考える必要がある。近世末から近代にかけてのアイヌ文化では、絵画や具象的な造形物を忌避する傾向が強かったとされ(北原 2011: 34)、カムイや人間の姿に似せた像を造らない(萱野 1974: 205) ものだといわれる。

参考文献

アイヌ無形文化伝承保存会

1986 『語りの中の生活史 AINU LIFE IN ORAL TRADITION』アイヌ無形文化伝承保存会
石田 戡

2013 「動物観の系譜」『日本の動物観』1-16, 東京大学出版会
稲田 浩二・小澤 俊夫

1989 『日本昔話通観 第1巻北海道 (アイヌ民族)』同朋社出版
大飼 哲夫

1933 「北海道産狼とその滅亡経路滅亡」『植物及び動物』1(8): 11-18, 養賢堂
煎本 孝

2010 『アイヌの熊祭り』雄山閣
ウォーカー, ブレット・L

2009 『絶滅した日本のオオカミ—その歴史と生態学』北海道大学出版会

荻原 真子

1987 「アイヌにおける動物説話の類型—神話の一考察」『国立民族学博物館研究報告別冊』5: 349-387, 国立民族学博物館

奥田 統己

1996 「歴史史料としてのアイヌ口頭文芸」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2: 19-31, 北海道立アイヌ民族文化研究センター

萱野 茂

1974 「木彫りの狼が、わたしを助けてくれた」『ウエペケレ集大成』アルドオ

北原 次郎太

2011 「越境する文化・アイヌ民族 (2)」『インターカルチュラル9 日本国際文化学会年報』: 28-41, 風行社

児島 恭子

2011 「アイヌの自然観と資源利用の倫理」『島と海と森の環境史』: 49-68, 文一総合出版

坂田 美奈子

2011 『アイヌ口承文学の認識論<エピステモロジー>』お茶の水書房

更科 源蔵

1982 『アイヌ文学の謎 更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅶ』みやま書房

更科 源蔵・更科 光

1976 『コタン生物記Ⅱ野獣・海獣・魚族篇』法政大学出版局

中川 裕

1997 『アイヌの物語世界』平凡社

2000 「狼から逃れた娘」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4: 52-66, 千葉大学

中川裕・志賀雪湖・奥田統己

1997 「アイヌ文学」『岩波講座 日本文学史第17巻 口承文芸2・アイヌ文学』、岩波書店

蓮池 悦子

1986 「『小母が草の小舟にわたしを乗せて流す』メノコユーカラのこと」『北海道の文化』55: 67-80, 北海道文化財保護協会

バッチェラー, ジョン

1995 『アイヌの伝承と民俗』青土社

北海道教育庁社会教育部文化課

1989 『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会

北海道立アイヌ民族文化研究センター

2009 『語り、継ぐ: アイヌ口承文芸の世界』北海道文学館

本田 優子 (米田優子)

1994 「アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について」『北海道立アイヌ民族研究文化センター』3: 23-39, 北海道アイヌ民族文化研究センター

1995 「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点: 穀物の起源説話に関する検討を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1: 1-25, 北海道立アイヌ民族文化研究センター

2004 「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海道立アイヌ民族研究文化センター研究紀要』10: 33-67, 北海道アイヌ民族文化研究センター

2005 「英雄叙事詩と散文説話」『アイヌの歴史と物語世界』札幌大学ペリフェリア・文化学研究

所

山田 孝子

1994 『アイヌの世界観』講談社

(うめき・かよ／北海道大学大学院文学研究科)

[資料]

【表1】オオカミ (horkew) が登場する北海道アイヌの口承文芸

※掲載は①話者の出身地を50音昇順、②話者名の50音昇順、③資料刊行年昇順とした。

番号	話者出身	話者(伝承者)	タイトル	形態	出典[編著者名・『書名・資料名』 出版社名]	刊行
1	旭川	杉村キナラブック	けちんぼ狼	神話	旭川市:旭川叢書3『キナラブック・ユーカラ集』 旭川叢書	1969
2	旭川	杉村キナラブック	神々や妖怪に欺かれた姉を救ったオタサの子供の話	散文説話	アイヌ無形文化伝承保存会:『人々の物語』 アイヌ無形文化伝承保存会	1983
3	旭川(名寄)	杉村キナラブック(北風磯吉)	犬=狼神に育てられたオタサム人の自叙	散文説話	大塚一美訳:『キナラブック口承説話』犬=狼神に育てられたオタサム人の自叙』 アイヌ口承芸術学習会	1994
4	旭川	砂沢クラ	海の怪物の話	英雄叙事詩	アイヌ無形文化伝承保存会:『アイヌ無形民俗文化財の記録 アイヌの民話1』 アイヌ無形文化伝承保存会	1983
5	旭川(歌志内)	砂沢クラ(砂沢智一郎)	ルオアイ神とポイヤンベの戦	英雄叙事詩	アイヌ無形文化伝承保存会:『英雄の物語』 アイヌ無形文化伝承保存会	1982
6	有珠	—	神の子が父親である神から、宝物を授かった話	散文説話	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅷ)』 北海道教育委員会	1989
7	浦河	浦河タレ	狼の神の話	散文説話	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅳ)』 北海道教育委員会	1984
8	静内	織田ステノ	狼の神が子供を授けた話	散文説話	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅳ)』 北海道教育委員会	1985
9	静内	織田ステノ	ユカラ7	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会:『静内地方の伝承Ⅲ—織田ステノの口承文芸(3)—』 北海道教育委員会	1993
10	静内	織田ステノ	ユカラ8	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会:『静内地方の伝承Ⅳ—織田ステノの口承文芸(4)—』 北海道教育委員会	1994
11	静内	織田ステノ	ユカラ12	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会:『静内地方の伝承Ⅳ—織田ステノの口承文芸(4)—』 北海道教育委員会	1994
12	千歳	白沢ナベ	狼から逃れた娘	散文説話	千葉大学ユーラシア言語文化論講座編:『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』第3号 千葉大学	2000
13	千歳	白沢ナベ	主人を助けられなかった犬	散文説話	千葉大学ユーラシア言語文化論講座編:『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』4 千葉大学	2001
14	千歳	白沢ナベ	狼が人間の母親に虐待された	散文説話	千葉大学ユーラシア言語文化論講座編:『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』9 千葉大学	2006
15	鶴居	八重九郎	ボンオタスタウンクルマイエ ユーカラ	散文説話	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成5年度 八重九郎の伝承(2)(アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅡ)』 北海道教育委員会	1994
16	登別	金成マツ	小和人	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅲ』 岩波文庫	1963
17	登別	金成マツ	神造頭・神造胴	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅲ』 岩波文庫	1963
18	登別	金成マツ	朱の輪	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅳ』 岩波文庫	1964
19	登別	金成マツ	ニシマク姫	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅴ』 岩波文庫	1965
20	登別	金成マツ	余市姫	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅵ』 岩波文庫	1966
21	登別	金成マツ	耳輪の曲	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅳ』 岩波文庫	1967
22	登別	金成マツ	草人形・くさひとかた	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユーカラ集Ⅳ』 岩波文庫	1975
23	登別	金成マツ	金の下駄	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和53年度 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(叙事詩ユーカラI)』 北海道教育委員会	1979
24	登別	金成マツ	細糸 柔糸	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:①『昭和55年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅡ)』 ②『昭和56年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅢ)』 ③『昭和57年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(ユーカラシリーズⅣ)』 北海道教育委員会	①1980 ②1981 ③1982
25	登別	金成マツ	鹿男の勇者 私を助ける	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:①『昭和57年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅤ)』 ②『昭和58年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅥ)』 北海道教育委員会	①1982 ②1983
26	登別	金成マツ	踊ろう跳ねよう物語	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:①『昭和59年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅦ)』 ②『昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅧ)』 ③『昭和61年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅨ)』 北海道教育委員会	①1985 ②1986 ③1987
27	登別	金成マツ	星上姫	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:①『昭和61年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅨ)』 ②『昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩ)』 北海道教育委員会	①1987 ②1988
28	登別	金成マツ	急流川の女が自分の憑き神を鹿にした	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編:①『昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩ)』 ②『昭和63年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅠ)』 北海道教育庁生涯学習部文化課編:③『平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅡ)』 北海道教育委員会	①1988 ②1989 ③1990
29	登別	金成マツ	おば・妹	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:①『平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅡ)』 ②『平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅢ)』 ③『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅣ)』 北海道教育委員会	①1990 ②1991 ③1992
30	登別	金成マツ	湖口のひと、救いに来る物語	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:①『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅣ)』 ②『平成4年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユーカラシリーズⅩⅤ)』 北海道教育委員会	①1992 ②1993

31	登別	金成マツ	沖の岬に住む悪い性の女	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編: ①『平成4年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズXV)』 ②『平成5年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズXVI)』 北海道教育委員会	①1993 ②1993
32	登別	金成マツ	虎杖丸別伝	英雄叙事詩	金田一京助全集編集委員会:『金田一京助全集 第十巻 アイヌ文学IV』三省堂	1993
33	登別	金成マツ	若きチクベニ神がオタサム村を撃つ物語	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成6年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズXVII)』 北海道教育委員会	1994
34	登別	金成マツ	オキクルミが私・ボンヤウンベに伝言を寄こした	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成13年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ24)』 北海道教育委員会	2002
35	登別	金成マツ	我が甥 我を争わす	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成15年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ25)』 北海道教育委員会	2003
36	登別	金成マツ	海の妖精十二人の兄妹	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成16年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ26)』 北海道教育委員会	2004
37	登別	金成マツ	隠された人喰い刀	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成17年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ27)』 北海道教育委員会	2005
38	登別	金成マツ	私を助けるために神が大鯨を頼んだ	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成17年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ28)』 北海道教育委員会	2006
39	登別	金成マツ	白い幣棚に黒い幣棚が打ち重なる物語	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成18年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ29)』 北海道教育委員会	2007
40	登別	金成マツ	わたしのおばが草小舟にわたしを乗せて流す	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成19年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ30)』 北海道教育委員会	2008
41	登別	金成マツ	アトウイヤの女	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成20年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ31)』 北海道教育委員会	2009
42	登別	金成マツ	金の小さな耳輪	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成21年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ34)』 北海道教育委員会	2010
43	登別	金成マツ	背鳍長の鯨	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成22年度アイヌ民俗文化財調査報告書(ユウカラシリーズ38)』 北海道教育委員会	2011
44	登別	知里幸恵	オマンベシ・ウン・マツ	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編: ①『昭和58年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズⅢ) 知里幸恵ノート』 ②『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズⅣ) 知里幸恵ノート』 ③『昭和60年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズⅤ) 知里幸恵ノート』 北海道教育委員会	①1984 ②1985 ③1986
45	登別	知里幸恵	小狼の神が自ら歌った歌「ホテナオ」	神謡	北海道邦彦編:『注解 アイヌ神謡集』	2003
46	平取	上田トシ	狼の襲撃から危うく難を逃れた女の話	散文説話	北海道教育庁生涯学習部文化課編:『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査XVI(補足調査3)』 北海道教育委員会	1996
47	平取	貝沢とるしの	白狼が人間の妻になった	散文説話	萱野茂:『ウエベケレ集大成』 アルドオ	1974
48	平取	川上まつ子	子犬たち	神謡	早稲田大学語学教育研究所:『アイヌ語音声資料10カタカナ版—川上まつ子さんの昔話と神謡—(ベナコリ)』 早稲田大学語学教育研究所	1999
49	平取	木村政吉	犬育て、悪者育て	英雄叙事詩	門別町郷土史研究会:『門別叙事詩』 門別町郷土史研究会	1969
50	平取	黒川てしめ	襟裳岬のシャチの神	神謡	萱野茂:『萱野茂のアイヌ神謡集2 カムイユカラ編Ⅱ』 平凡社	1998
51	平取	鍋沢元蔵	クト・ネシリカ	英雄叙事詩	門別町郷土史研究会:『アイヌ叙事詩 クト・ネシリカ』 門別町郷土史研究会	1965
52	平取	鍋沢ワカルバ	虎杖丸	英雄叙事詩	金田一京助全集編集委員会:『金田一京助全集 第9巻 アイヌ文学Ⅲ』 三省堂	1993
53	平取	西島てる	木彫りの狼が、わたしを助けてくれた	散文説話	萱野茂:『ウエベケレ集大成』 アルドオ	1974
54	平取	二谷一太郎	カッコウ鳥の絵のある小袖	英雄叙事詩	萱野茂:『萱野茂のアイヌ神謡集8 ユカラ編Ⅱ』 平凡社	1998
55	本別	沢井トメノ	カムイ・ウチャシコマ	散文説話	北海道立アイヌ民俗文化研究センター:『北海道立アイヌ民俗文化研究センター研究紀要 第3号』 北海道立アイヌ民俗文化研究センター	1997
56	芽室	—	狼神の神謡	神謡	日本放送協会:『アイヌ伝統音楽』 日本放送出版協会	1965
57	門別	平賀エテノア	KAMUI OINA	英雄叙事詩	金田一京助訳注:『アイヌ叙事詩 ユウカラ集Ⅱ』 岩波文庫	1961
58	門別	平賀エテノア	狼の女神の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
59	門別	平賀エテノア	斑文鳥の神の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
60	門別	平賀エテノア	村主の鼻神の妹神の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
61	門別	平賀エテノア	狩人の旦那(大将)の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
62	門別	平賀エテノア	シヌタツプカ嬢の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
63	門別	平賀エテノア	始祖神の自叙	神謡	久保寺逸彦編:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店	1977
64	門別	平賀エテノア	オオカミ神と村おさ	神謡	萱野茂:『萱野茂のアイヌ神謡集2 カムイユカラ編Ⅱ』 平凡社	1998
65	門別	平賀エテノア	自分の憑き神と戦う	英雄叙事詩	萱野茂:『萱野茂のアイヌ神謡集9 ユカラ編Ⅲ』 平凡社	1998
66	門別	平賀さだも	トウミクミク	神謡	中川裕:『母と子のアイヌ語教室 第11回』	1991
67	門別	平賀ヤヤシ	KUTUNE SHIRKA	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課: ①『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅤ 久保寺逸彦ノート』 ②『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅦ 久保寺逸彦ノート』 ③『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅧ 久保寺逸彦ノート』 ④『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅩ 久保寺逸彦ノート』 北海道教育委員会	①1987 ②1988 ③1989 ④1990
68	門別	松島トミ	オオカミの木彫りを持つ女を救った男のウエベケレ	散文説話	北海道立アイヌ民俗文化研究センター:『北海道立アイヌ民俗文化研究センター研究紀要 第8号』 北海道立アイヌ民俗文化研究センター	2002